

我が影に紅葉且つ散るをんな坂
 廃屋の戸を虜とす蔦紅葉
 吟詠の声蘆原の遙かより
 内海の島々煙る初時雨
 曼荼羅に打ち敷く雑木紅葉かな
 紅葉かつ散りて嵩なす深山道
 大紅葉天蓋なせる野点かな
 列なして玉砂利を踏む時雨傘
 大吉のみくじ疑ふ神の留守
 鯖街道卯建の軒に吊し柿

露万朶ダイヤ光し朝日出づ
嵯峨小春と行き斯くゆく人力車
乱れ髪振るごと風の枯れ芒
断崖の天辺石路の花明かり
陵の裳裾は雑木紅葉かな
流木の打ち臥す渚冬ざる

心字池 秋日影濃き要石
行厨は本丸の庭菊日和
波立てて諍ふ鯉や神の留守
秋日いま硯の海に昏れなんと

火矢駈けるごとく夕焼の飛行雲
無位無冠なれど健康文化の日
留守宮の鈴を大きく鳴らしけり
鈴生りに実の生る楓大樹かな
とろろ汁雑穀飯に適ひたり

田仕舞の煙おちこち谷戸の里
白壁に色を落としぬ熟し柿

菜よせあうぼわつ 治
 しさいつかんく
 々子じこぎばし 男天

せひよと宏ぼ
いかしもん
じり女え虎こ

せよ菜うう
いし つつ
じ女々ぎぎ

雅 あ は 宏 せ
さ く い
流 こ 子 虎 じ

三き
づ
刀な

綿菓子のごとく膨れる秋の雲
 炉を開く茶室に匂ふ青畳
 里芋の葉より現れたる農婦かな
 格子戸に透く大輪の菊の鉢
 鈴の緒の真新となりて神迎え
 群青の一枚鏡海小春
 ゴルフ場訪へば休日日向ぼこ
 方丈の裏に回れば石踏黄なり

二〇二一年一〇月三二日

二〇一一年一月三日

築山の菊は五彩を競ひけり
病院の廊下は画廊窓紅葉
居眠りすセラピードッグ苑小春
陵の見えゐて遠し里時雨
寝ぐせにはあらずおしやれの七五三
大屋根を登りつめたる牽牛花
城址とて石垣ばかり草もみぢ
修復の仁王の玉眼うそ寒し
塔見えて大本山の紅葉濃し

二〇二一年一月三〇日

夕映えの蘆原に落つ鳥の影
一刷けの雲は純白秋の晴
秋風に金明竹のさやぎかな
喜寿の宴とて室の花侍らしぬ
日向ぼこ玉座にお尻はばかりず
猫通る下段を空けて障子貼る
枯山水灰と色づく初時雨
杉美林抜けて展けし柿の里
露万朶なる野の草に朝日射す

よあわは満せ宏と
しさかくいも
子こば子天じ虎え

宏よはぽなひこつぽ
しくんつかすくん
虎女子こきりすしこ

よき宏有うなうよせ
しづつつつしい
女な虎香ぎきぎ子じ

毎日句会みの選・二〇一一年一月七日